



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「硯滴」第一、第二、第三
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	雷鳥時報, 1
Issue Date	1931-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77688
Type	article
File Information	A010_061S6P35_38.pdf



18

雷鳥時報

や
一
報

1931

昭和
六年
三月

鳳凰山塊の山嶺御座石鉢泉附近を漫歩して来ました。
この附近の山の美しさ。それは植林された落葉松の緑の装ひ。山上にいろがらる白樺林の輝
き、寒雪光る連嶺の雄大。すべてそれらの融合が團き出した自然のうるわさです。
特に白樺の密林は、それは実に広大のものです。
又落葉松の緑の木蔭から輝く駒鳳凰の連峯を望む鳥雀峠の景観は印象的でした。浅春の山
の幸は豊富です。わたらの葉を味ひ、わらびをたべ、山椒の木の芽を味ひました。



硯滴

第一

鈴木 永次郎

山は永遠の悪人として永り固私の心の奥に幽か友声でのみさゝやいて居たが、近來どうやら夢でなくさわる幸の出来る現実の山の悪人の声及雨とえ旋めまやうである。

私が丈夫になつた證據である、近頃内大日岳に登つて見やうなど云ふと介さんや北さん小里さんなどの大先輩はむづくりするかも知れぬ、同君等が岐阜に居た時は私は病氣ばかりして唇戸から弱い印象ばかり与へて唇舌に遠ひなかつたのである。

けれども此頃大日は正に私の現実の悪人として明らかになり招いて居る。

私は今帝人の姿をはつきりと見る事が出来る、夢で見た時の様に和らかな美の一切を具存してはなれにしても、近づいて見る現実の悪人の脂粉の香は又格別である、而も私の悪人は大日丈ではない、私は性多情なのかも知れぬ。

硯滴 第二

小拱は自分を以つて自然を見る、途擧の大人達は人を以つて人を見る、山岳家は自然を以

て人を見なければならぬ
人の世の底知れぬね創るみやそこに喘ぐ隣れなる自己も自然を以つて見れば物のあはれい
と深き景物ではないか

硯 滴 第三

私は今溪谷の部落の調査をものにしたひと頑張つて居る。此調査を始めた頃、平吉、川崎、伊東三君が雪の中をスキトで野麦に乗り込んで調査してくれた。そしてその報告の篇約二週間の夜の時三時頃まで当勝小三丁目目にあつた。私の家に通つてくれた。秋寒の季節だつたから三君は毛布やフトンをかぶつて下度ゲルマさんの探取をさせてやつて来たものだ。もう何だか一昔前の心地もするが、私には懐かしましきまで懐かしき思い出である。

私のフミなリ調査の篇に助力してくれて了学友諸君に酬ゆる篇にも、私は此仕事は是非ものにしなければならぬ。

漸く自分文では自分文では自信を持つ事の出来る「農村社今迄部落調査方々」が最近にあとまつたので今上梓して居る。七月始めまでには出来上るであらう。私は此かうの感謝をもつて其を三君達に賜りたいと思つて居る。私がまだあの仕事を少くとも努力しつゝりてゐると云ふ證據にもなるから。

今私は村田實二君の助力を得て大日の麓の西洞を調査して居る。去年の秋初めて私自身もその西洞に出掛けて行つた。大日はその時みそめ友のである。

部 報

G. A. C. 山岳部本年度夏季登山計畫

山岳部では例により別紙のやうな夏季計畫を發表した。余り要つた計畫もないやうだが第九、第十の両班は一十目に着く。

第九班は木曾の王滝川の上流から三浦山を越え御岳の西南側の未知の区域に新登路を見出さうとするものである。興味があつたものがある。第十班は今迄に部として度々計畫されながら不幸にして一變も実行されなかつたものであるが、今年には目下四名の確実な希望者があり今から着く準備を進めて居るし必ず実行すると言明して居るから、今年こそ部としては初めて南アルプス巡礼が出るわけだ。各班とも希望者があるので恐らくは皆実行されるだろうが本年は部の指導的立場に居る者が少ないので多数の班がリーダーに困つてゐるやうだ。